

1. 変更内容、理由及び断層連続性評価への影響

・破砕幅を2.3cmに変更（No.130）

【理由】コアの再観察により破砕幅を計測した結果、破砕幅は2.3cmと判断した。

【断層連続性評価への影響】なし

2. 変更箇所

a 破砕幅の記載を「2.3cm」に変更（No.130）

H27-B-4 深度29.74~29.78m 破碎幅 (No.130) の変更

- 従前提示していたデータでは性状一覧表に破碎幅を3.7cmと記載していたが、以下のことから、2.3cmが正しい値であるため、3.7cmから2.3cmに変更した。
- コアの再観察の結果、破碎幅は2.3cmであった。
- コア観察カードに破碎幅の記載が無く、従前提示していたデータである3.7cmは破碎部の区間長を真幅と誤って記載していたと推定される。

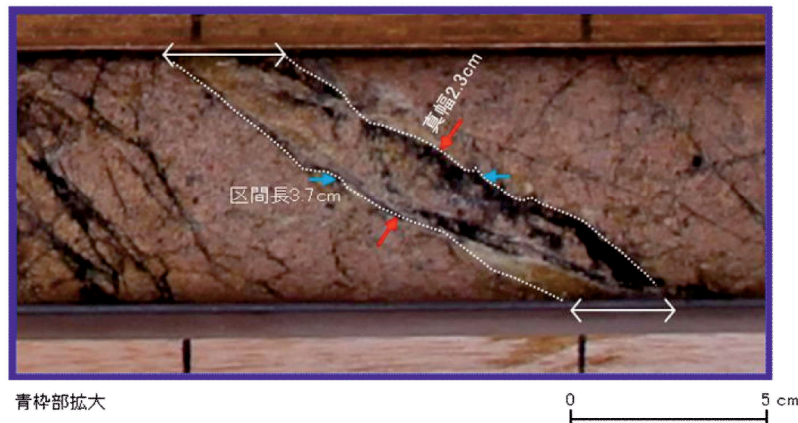
破碎幅算出資料(H27-B-4 深度29.74~29.78m)

・実測した破碎幅は2.3cmである。

コア写真



凡例
 ← → 破碎部範囲
 ※:写真上は白色で記載



青枠部拡大

該当箇所のコア観察カード

29.74~29.78 此の範囲で破碎部 上盤が白色土層
 下盤がマンガン浸染層 上盤側は幅が一部で変
 化を伴う。

破碎幅の記載は無し

凡例
 ← → : 従前の破碎幅
 ← → : 変更後の破碎幅

1. 変更内容、理由及び断層連続性評価への影響

・最新活動面を65.65mに変更 (No.131)

【理由】再観察の結果、深度65.65mのせん断面を最新活動面と判断した。

・走向・傾斜をN1W80Wに変更 (No.132)

【理由】最新活動面の深度の変更 (No.131) により、走向・傾斜をN1W80Wに変更した。

【断層連続性評価への影響】なし

2. 変更箇所

a 最新活動面の記載を「65.65m」に変更 (No.131)

b 走向・傾斜の記載を「N1W80W」に変更 (No.132)

H27-B-4 深度65.59~65.72m 最新活動面 (No.131) を変更

- 従前提示していたデータは、最新活動面の深度を65.72mとしていた※が、以下のことから、深度65.65mが正しい値であるため、最新活動面の深度を65.72mから65.65mに変更した。
- 当初のコア観察カードには最新活動面の記載が無く、深度65.72mに部分的な粘土脈の記載があったことから、深度65.72mを最新活動面としていたが、その後のコアの再観察の結果、深度65.65mに細粒部を伴い、より直線的なせん断面があったことから、深度65.65mを最新活動面として認定した。
- 従前の作業プロセスでは、今回の元となるデータに相当する記録を作成していなかったため、根拠がトレースできなかった。
- ※当該破碎部の最新活動面は、第833回審査会合資料 机上配布資料2の性状一覧表に記載はなく、令和3年7月16日提出の本編資料の性状一覧表に記載していた。

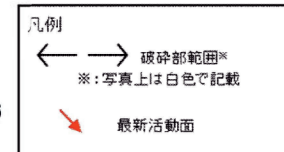
最新活動面認定根拠(H27-B-4 深度65.59~65.72m)

・細粒部を伴い最も直線的であることから、深度65.65mのせん断面を最新活動面に認定した。

コア写真



深度65.72mに明瞭な細粒部は伴わない。



青枠部拡大

0 5 cm



青枠部拡大

0 5 cm



該当箇所のコア観察カード

65.59~65.72m 破碎部範囲110cm 砂質
65.59 65.72m 部分的に灰白色粘土
65.72 62m 部分的に灰白色粘土
明瞭なせん断面無し

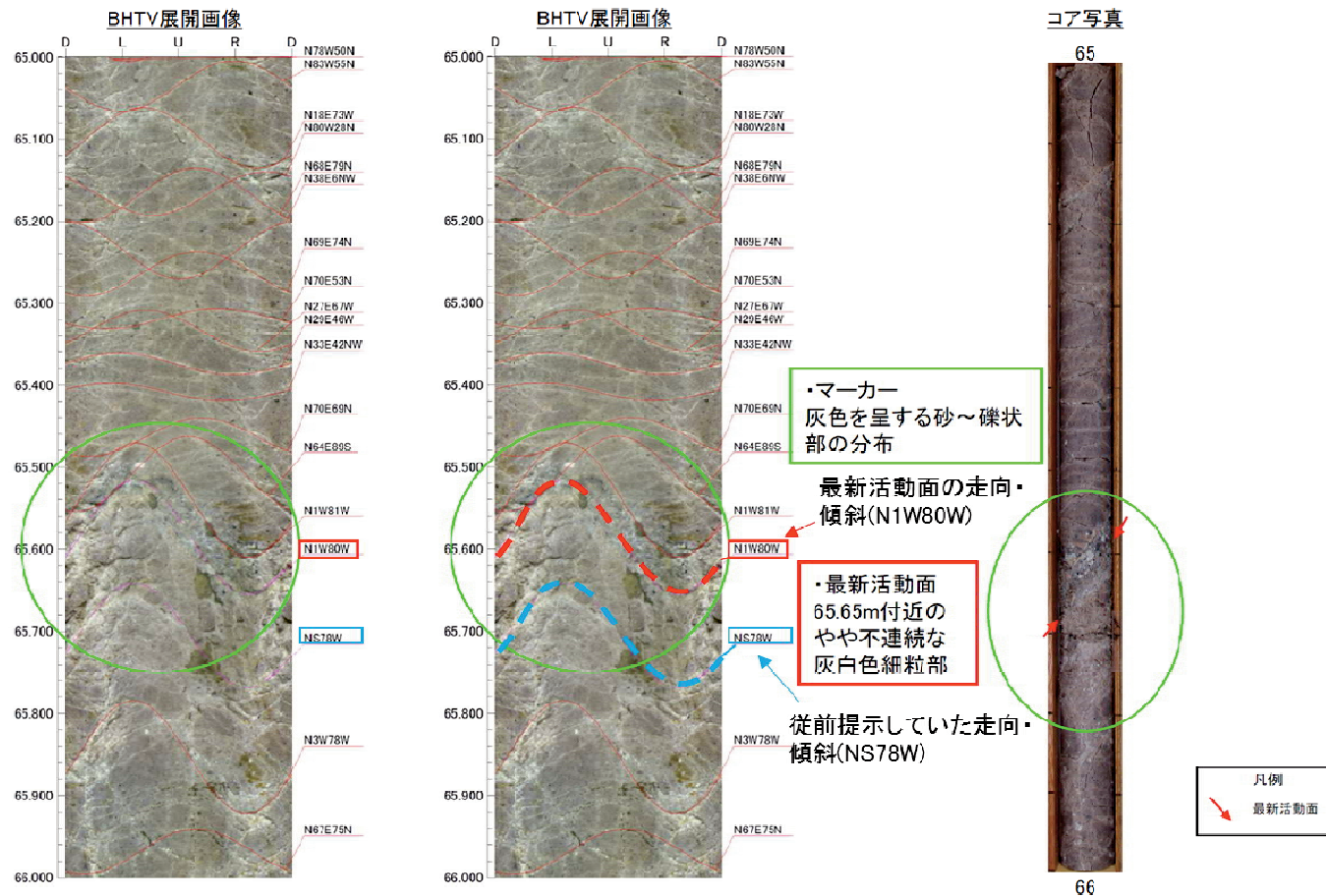
最新活動面の記載なし

H27-B-4 深度65.59~65.72m 最新活動面 (No.131) の変更に伴い、走向・傾斜 (No.132) を変更

- 従前提示していたデータでは、性状一覧表にNS78Wと記載していたが、最新活動面の深度を変更したことから以下のとおり走向・傾斜をNS78WからN1W80Wに変更した。

ボアホールカメラ展開画像との対比結果 (H27-B-4 深度65.59~65.72m)

- H27-B-4 深度65.59~65.72mの破碎部の最新活動面の走向・傾斜はN1° W80° Wである。



1. 変更内容、理由及び断層連続性評価への影響

・走向・傾斜をN17E75Wに見直し (No.133)

【理由】BHTV展開画像にて正しい位置の走向・傾斜を読み取った結果

・条線方向を42Rに見直し (No.134)

【理由】走向・傾斜の見直し (No.133) により, 基準方位が変わることに伴う変更

【断層連続性評価への影響】なし

2. 変更箇所

a 走向・傾斜を「N17E75W」に変更 (No.133)

b 条線方向を「42R」、レイク角を「42°南傾斜」に変更 (No.134)

c 見直し後の走向・傾斜、条線方向に基づく図に変更 (No.133,134)

H27-B-4 深度93.13~93.22m 最新活動面の走向・傾斜 (No.133) を変更、それに伴い条線方向 (No.134) を変更

従前

見直し後

第833回審査会合
机上配布資料2
敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造について
参考資料2 性状一覧表
参考2-165頁

第833回審査会合 机上配布資料2に追記 (青太枠)

14.H-1~f-b-4-6破砕帯
性状一覧表 (9/13)

No.133
N10E78W
No.134
40R

破砕帯名	種別	破砕帯区分	工法	方位	傾斜	最大開口幅 (mm)	最大開口長さ (mm)	最大開口深さ (mm)	性状	写真	
H27-B-4 (観測47)	a	N10E	78W	7.0	1.2	b	40R	正	直	93	
2号炉基礎	-	N20E	70W	90.0	3.0	-	-	-	-	-	
2号炉基礎	-	N0E	77W	100.0	1.0	有	有	有	有	有	

凡例
最新活動面 ← → 破砕帯 条線方向 破砕帯の走向傾斜から真の幅に換算した。 非平滑 最新活動面が連続的なもの

【破砕帯】
粘土状破砕帯、砂状破砕帯、角状破砕帯、固結した粘土状破砕帯、固結した砂状破砕帯、固結した角状破砕帯の合計の幅とし、破砕帯の走向傾斜から真の幅に換算した。
【条線】
有 最新活動面が連続的なもの
非平滑 最新活動面が連続的なもの

参考2-165

破砕帯名	種別	工法	方位	傾斜	最大開口幅 (mm)	最大開口長さ (mm)	最大開口深さ (mm)	最新活動面			性状	写真	
								有	有	有			
H27-B-4 (観測47)	①	N10E	78W	7.0	1.2	有	有	有	有	有	有	有	93
H27-B-4 (観測47)	②	N17E	75W	7.0	1.2	有	有	有	有	有	有	有	94
H27-B-4 (観測47)	③	N17E	75W	7.0	1.2	有	有	有	有	有	有	有	95
H27-B-4 (観測47)	④	N17E	75W	7.0	1.2	有	有	有	有	有	有	有	96

No.133
N17E75W
No.134
42R

凡例
最新活動面 ← → 破砕帯 条線方向 破砕帯の走向傾斜から真の幅に換算した。 非平滑 最新活動面が連続的なもの

※1 断層区分の総合評価に基づき記載し、肉眼「有」のうち総合評価「無」となる箇所は「-」を記載
※2 斜めボーリングの場合は、計測値を修正した値を記載
※3 卓越しない成分については「-」を記載(面成分「-」は薄片観察を行っていない箇所)
-(上記以外): データを取得していない箇所

第7.4.4.420図 破砕帯性状一覧 (H27-B-4 (H27-B-4))

H27-B-4 深度93.13~93.22m 最新活動面の走向・傾斜 (No.133) を変更、それに伴い条線方向 (No.134) を変更

従前

見直し後

第833回審査会合

机上配布資料1

敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造について

参考資料1 薄片観察結果

参考1-171頁

第833回審査会合 机上配布資料1に追記 (青太枠)

No.133 No.134

(走向・傾斜 : N10°E 78°W、
レイク角 : 40° 南傾斜
に基づく条線観察結果)

No.133 No.134

(走向・傾斜 : N10°E 78°W、
レイク角 : 40° 南傾斜
に基づく模式図)

No.133 No.134

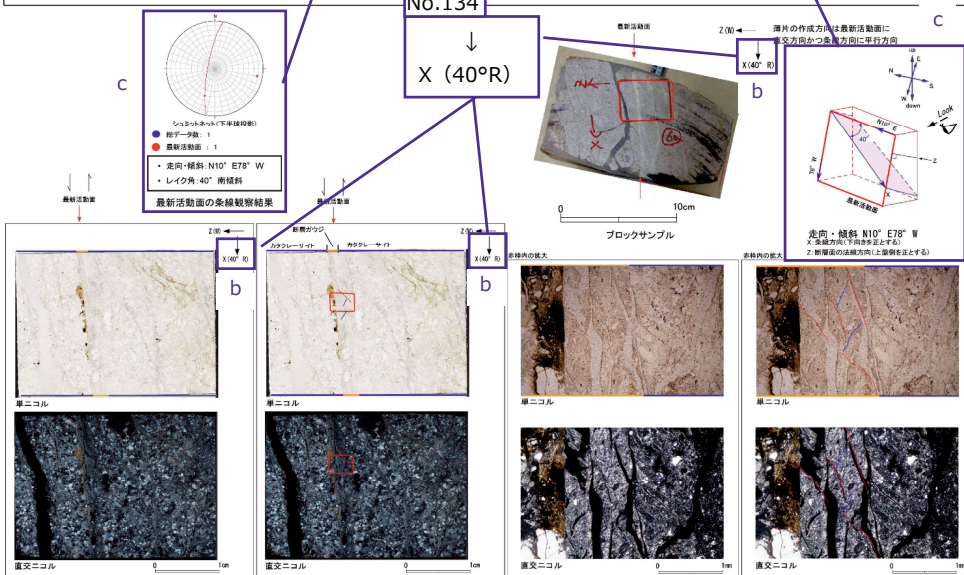
(走向・傾斜 : N17°E 75°W、
レイク角 : 42° 南傾斜
に基づく条線観察結果)

No.133 No.134

(走向・傾斜 : N17°E 75°W、
レイク角 : 42° 南傾斜
に基づく模式図)

H-7破砕帯 薄片試料観察 (H27-B-4 深度93.13m)

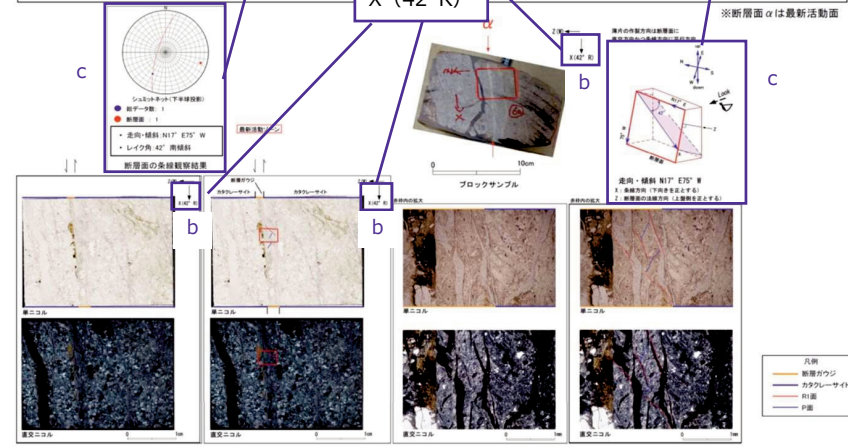
H27-B-4のボーリングコア (深度93.13m) から採取した薄片試料の観察結果。最新活動面の変位センスは、左ずれを伴う正断層である。



参考1-171

H27-B-4のボーリングコアから採取した薄片試料の観察結果によれば最新活動ゾーンの変位センスは、左ずれを伴う正断層である。最新活動ゾーンには、断層ガウジとカタクレーサイトの特徴が認められるが、カタクレーサイトの特徴は、カタクレーサイトに断層ガウジに取り込まれたものと考えられることから断層ガウジと判断した。

- (断層ガウジ) せん断構造に伴う粘土鉱物の定向配列が認められることより断層ガウジと判断した。
- (断層ガウジ) 基質は粘土鉱物を主体とする。
- (断層ガウジ) 粘土状部の分布は帯状で直線的である。
- 岩片は少ない。
- (断層ガウジ) 丸みを帯びている岩片が多い。
- (カタクレーサイト) 岩片の粒界を横断する破断面が認められる。



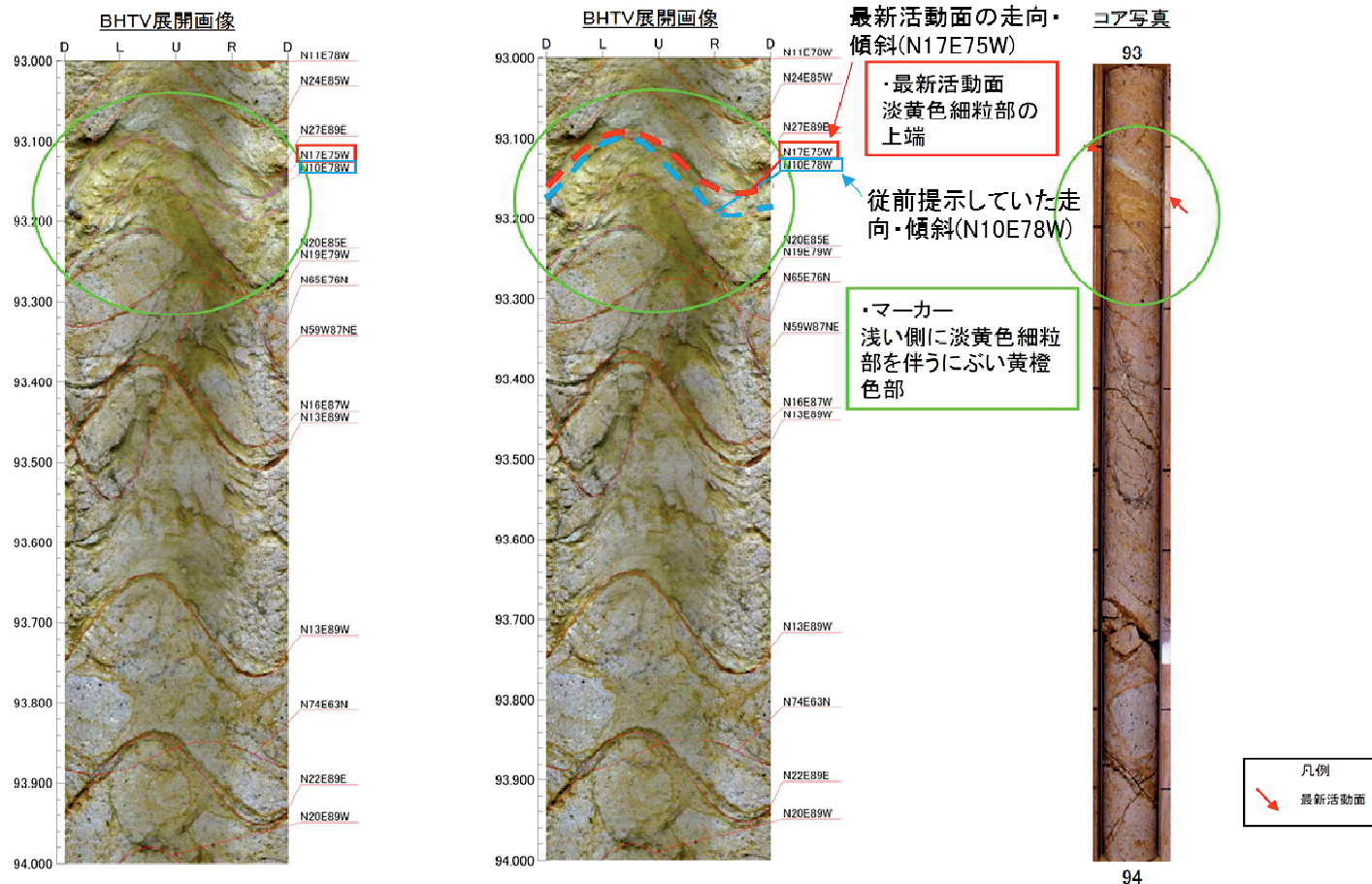
第7.4.4.343図 (3) 破砕部性状 H27-B-4 深度93.13~93.22m (変位センス, 薄片観察による断層区分(1/3))

H27-B-4 深度93.13~93.22m 最新活動面の走向・傾斜 (No.133) を変更

- 従前提示していたデータでは、性状一覧表にN10E78Wと記載していたが、BHTV展開画像からの走向・傾斜を読み誤っていたことから以下のとおり走向・傾斜をN10E78W からN17E75Wに変更した。

ボアホールカメラ展開画像との対比結果 (H27-B-4 深度93.13~93.22m)

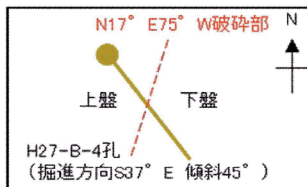
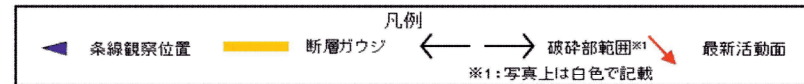
- H27-B-4 深度93.13~93.22mの破碎部の最新活動面の走向・傾斜はN17° E75° Wである。



H27-B-4 深度93.13~93.22m 最新活動面の走向・傾斜 (No.133) の変更に伴い、条線方向 (No.134) を変更

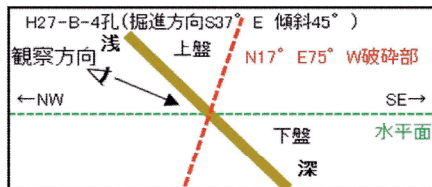
- H27-B-4孔 深度93.13mの断層面の走向・傾斜はN17°E75°Wであり、条線観察は上盤側から実施している。

コア写真



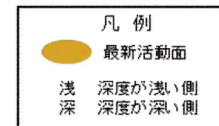
・ボーリングは掘進方向S37° E、傾斜45° で掘削している。
 ・破碎部の走向・傾斜はN17° E75° Wであり、ボーリングと破碎部の平面的な位置関係は左図のようになる。
 ・破碎部は西傾斜であることから、西側が上盤、東側が下盤となる。

図1 H27-B-4孔位置平面図(模式図)



・ボーリング(掘進方向S37° E、傾斜45°)と破碎部(走向・傾斜N17° E75° W)をボーリング孔沿いの断面図で示すと左図のようになる。
 ・ボーリング孔の浅い側が上盤、深い側が下盤となる。

図2 H27-B-4孔を通る断面図(模式図)



※図2で示した観察方向から、最新活動面に正対して描いた3次元的な図

図3 最新活動面と走向・傾斜の関係図